



# ドイツ語の現在完了形と過去形の意味的相違と未来形と現在形の意味的相違の並行性について

著者	嶋？ 啓
雑誌名	東北大学文学研究科研究年報
巻	67
ページ	50-37
発行年	2018-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00122390">http://hdl.handle.net/10097/00122390</a>

# ドイツ語の現在完了形と過去形の意味的相違と 未来形と現在形の意味的相違の並行性について\*

嶋 崎 啓

## 0. 導 入

ドイツ語の現在完了形と過去形という、過去を表す二つの時制が意味機能としてどのように異なるのかについてはこれまで盛んに議論されてきた。また、未来形と（未来を表す）現在形の意味機能的な違いについても多様な見解が出されてきた。しかし、これら四つの時制の意味的相違を関連づけた研究は皆無である。本論は、現在完了形と未来形が似た意味機能を持ち、また、過去形と現在形が似ているという、過去と未来を表す二つずつの時制間に二対二の並行性があることを主張しようとするものである。

## 1. 現在完了形と過去形

二つの形態の意味的相違が問題になるのは、その意味が近似する場合である。ドイツ語の現在完了形と過去形の機能は明確に異なる場合も少なくない。例えば、次の①～④のような場合、現在完了形と過去形は意味機能が異なるので、意味的相違はそもそも問題にならないので、あらかじめ考察の対象から除外される。

### ① 現在完了形が未来を表す場合

下の(1)-(3)の例のように、現在完了形は未来における相対的な過去を表す場合がめずらしくない。過去形がこの機能で用いられることは非常に少ない<sup>1</sup>ので、二つの時

\* 本論は、2017年5月27日に日本大学で行われた日本独文学会2017年春季研究発表会での同名の口頭発表にもとづく。

<sup>1</sup> ただし、過去形が未来における相対的な過去を表す場合はある。その際の動詞はおおよそ„sein“に限られる。[...] aber nach vielen Jahren, vielleicht als Greis, erfährt er die Ablehnung, erfährt, daß alles verloren ist und sein Leben vergeblich war. (Kafka: Schloss 212) (しかし長い年月を経て、場合によっては

制の違いは問題にならない。

- (1) [...] es wird auch kälter, und du wirst sehen, daß morgen der ganze Teich gefroren ist. (Stifter, S. 31) (もっと寒くなるよ。明日は池が全面凍っているのが見られるよ) (太字筆者, 以下同様)
- (2) [...] und ist es denn nicht auch möglich, daß du, wenn du es angehört hast, weggehst und nichts mehr von uns wirst wissen wollen [...] (Kafka, S. 178) (あなたは、それを聞いてしまえば、逃げたり、私たちのことをこれ以上知ろうとは思わなくなるのではないのでしょうか)
- (3) Wenn aber Sordini auch nur den geringsten Vorteil gegenüber irgend jemandem in Händen hat, hat er schon gesiegt [...] (Kafka, S. 66) (ソルディーニは誰かに対してほんのわずかの利点でも自分のものにさえすれば、それでもう彼は勝ったも同然なのです)

## ② 完了相動詞による現在完了形が現在における結果の状態を含意する場合

次の(4)の例のように、完了相の動詞の現在完了形は、特別な文脈が与えられなければ、動詞の表す事態の完了後の状態が現在まで続いていることを含意する<sup>2</sup>。(5)の過去形にはそのような含意がない。

- (4) Peter ist (vor einigen Stunden) eingeschlafen. (→ Peter schläft jetzt.) (Helbig/Buscha 1999: 151 f.) (ペーターは [数時間前に] 眠り込んだ [→ペーターは今眠っている])
- (5) Peter schlief (vor einigen Stunden) ein. (↯ Peter schläft jetzt.) (ペーターは [数時間前に] 眠り込んだ [↯ ペーターは今眠っている])

---

老人になって、彼は「城に勤めることに対する」否認を知る。すべて失われ、自分の人生が無駄であったことを知るのである。(下線筆者, 以下同様)

<sup>2</sup> 完了相動詞の現在完了形がいつでも現在の状態を含意するわけではない。文脈によっては現在の状態を含意しない場合がある。次の例では、「私」は発話時現在起きて、この文を発話しているので、当然のことながら「眠っている」状態にはない。Gegen Morgen bin ich wirklich eingeschlafen, denn vier Uhr habe ich es schlagen hören, aber fünf nicht mehr [...] (Huch: S. 97) (朝方私は本当に眠り込みました。というのも、時計が4時を打つのは聞きましたが、5時の音はもはや聞かなかったからです)

## ③ 「これまでずっと～してきた」という現在までの継続的な事態を表す現在完了形

次の (6) のように、現在完了形が過去から発話時現在にいたるまでである事態が継続していることを表す場合がある。この種の現在完了形を作るのは、多くの場合継続相の動詞であるが、完了相の動詞でも、事態の反復を表して、事態の継続を表すこともある。いずれにしても過去形では発話時現在まで事態が継続することを表すことは一般的でない。

- (6) [...] aber ich habe in meinem Leben die Augen offen gehabt und bin mit vielen Leuten zusammengekommen und habe die ganze Last der Wirtschaft allein getragen [...] (Kafka, S. 49) (しかし私は生きてる間注意をして、多くの人と知り合って、旅館の仕事の負担を一人で全部背負ってきた)

## ④ 継続相動詞による事態の終結を表す現在完了形

やや特殊な用法ではあるが、継続相の動詞の現在完了形が事態の終結を表し、発話時現在にはその事態が存在しないことを表す場合がある。下の (7) では、「一番の美人である」という事態がもはや存在しないことが表される。この種の現在完了形を作る動詞は、継続相動詞の中でも、ほぼ sein に限定されていると言ってよい。

- (7) [...] aber die Alte schnürte geschwind und schnürte so fest, daß dem Sneewittchen der Atem verging und es für tot hinfiel. »Nun bist du die schönste gewesen«, sprach sie [...] (Grimm: Sneewittchen. S. 273) (老女はすばやく紐を締め、あまりにもきつく締めたので、白雪姫の息は止まり、死んだように倒れた。「これでお前は一番の美人ではなくなった」と彼女は言った)

このように、現在完了形と過去形の意味的差異が比較的はっきりしている場合はそもそも両者の違いは問題にならない。両者の違いが問題になるのは、下の (8) と (9) のように違いが明瞭でない場合である。

- (8) Wir waren gestern im Schillertheater. (Wunderlich 1970: 142) (私たちは昨日シラー劇場に行った [シラー劇場にいた])

(90) ドイツ語の現在完了形と過去形の意味的相違と未来形と現在形の意味的相違の並行性について (嶋崎)

- (9) Wir sind gestern im Schillertheater gewesen. (ibd.) (私たちは昨日シラー劇場に行った [シラー劇場にいた])

しかし、意味機能が近似する場合でも何らかの違いがあると筆者は考える。その出発点になるのが、周知のことが現在完了形で表されると奇異な表現になるということである。ティーロフは、現在完了形は多くの場合新情報を表すのに用いられると言う (Thieroff 1992 : 179 ff.)。

- (10) Goethe ist gestorben. (Thieroff, ibd.) (ゲーテは死んだ)

- (11) Goethe starb. (ibd., 180) (ゲーテは死んだ)

上の現在完了形の (10) は、自明のことを述べているため、この文を聞いた人に奇妙な印象を与える。それに対し、同じ内容を表す過去形の (11) ではそのような奇妙な印象は生まれない。同様に、下の (12) や (13) も、分かっていることを今さらながら言われる印象を与えて、奇妙な表現であるように人に感じさせる。

- (12) Goethe hat geheiratet. (ibd.) (ゲーテは結婚した)

- (13) Goethe hat gehustet. (ibd.) (ゲーテは咳をした)

ただし、このような表現も、何らかの追加情報により文全体が新情報と見なされると、現在完了形で表すことができるようになる。

- (14) Goethe ist in Weimar gestorben. (ibd., 181) (ゲーテはヴァイマルで死んだ)

- (15) Goethe hat nur einmal geheiratet. (ibd.) (ゲーテは一度だけ結婚した)

- (16) Goethe hat beim Rauchen gehustet. (ibd.) (ゲーテは喫煙の際には咳をした)

一方、過去形も新情報を表すことはある。例えば、小説の語りの地の文で用いられる過去形の文はすべて新しい情報を表すかもしれない。しかし、過去形において重要なのは、事態の生起について聞き手が疑いを抱かないと話し手が判断していることであり、新情報であるか否かは本質的な問題ではない。

その点で言えば、現在完了形も、新情報を表すというより、表される事態の生起について聞き手が疑いを抱く可能性がある事態を、話し手が確定的なものとして表すために用いられると言うことができよう。つまり、現在完了形と過去形の本質的な差異は、新情報か否かではなく、事態の生起について聞き手が疑いを抱くと話し手が判断しているか否かである。聞き手が疑いを抱く可能性があるとし話し手が判断すれば現在完了形を用い、聞き手が疑いを抱かないだろうと判断すれば過去形を用いるのである。

この考え方は、ヴァインリヒの有名な時制の区分（Weinrich 1985: 20 ff.）と関連づけられる。ヴァインリヒは時制を論評の時制（*besprechendes Tempus*）と語りの時制（*erzählendes Tempus*）に二分した。論評の時制においては、その文が発話された際に聞き手は緊張して聞かねばならない。それに対し、語りの時制においては、聞き手は緊張を解いて落ち着いて発話内容に集中することができる。ドイツ語の現在完了形は論評の時制に、過去形は語りの時制に振り分けられる。ここで、ではなぜ現在完了形において聞き手が緊張しなければならないのかと問うならば、現在完了形を使用すると、表される事態の生起に聞き手が疑いを抱くかもしれないが、話し手本人はその事態の生起が確実だと判断しているという、現在完了形の使用に込められた話し手の気持ちが聞き手に伝わるからである。聞き手はそうになると、事態の生起に疑いを抱くか否かについて何らかの反応をしなければならない。一方、過去形を用いれば、事態の生起に聞き手が疑いを抱かないと話し手が判断していることが聞き手に伝えられるので、聞き手は、実際には疑いを抱く場合があるとしても、発話内容の真偽について反応する必要がないので、緊張を解くことができる。

これに関連することとして、一連の過去の出来事を、最初は現在完了形で語り始め、そのあと過去形で語り、最後に現在完了形で締め括るという、語りの型がある（Vgl. Weinrich, *ibid.*, 64 ff.）。これも、その一連の出来事の導入においては、その出来事が起こったのかどうかを聞き手が疑う可能性があるとし話し手は考え現在完了形を用いるが、一旦、語りが始まるとその真偽については問題にせず、内容そのものに集中するために過去形を用い、最後に再び現在完了形を使って、聞き手は疑いを持つかもしれないが、本当に起こったということを改めて示すということで説明できる。

また従来の研究には、両時制を感情性に基づいて区分するという見解もある。筆者の考えでは、これも事態生起の確実性についての話し手の判断という区分法と関連づけられる。感情性に基づく時制の区分とは、現在完了形においては、話し手が表される事態

に「感情的に関与する (gefühlmäßig beteiligt)」,あるいはその事態にアクチュアリティを認めるのに対し,過去形においては,話し手は事態に「ある一定の冷静な距離 (eine gewisse nüchterne Distanz)」を取るという区分である (Grønvik 1986: 56, さらに金子 2008, 2013 も参照)。つまり,現在完了形においては話し手が感情を込める度合いが高くなるのに対し,過去形ではその度合いが下がり,話し手がより客観的になるということである。もし現在完了形においては聞き手が事態の生起を疑うかもしれないと話し手が考えるとすれば,話し手はその事態が本当に起こったことだと熱意を持って伝えねばならないだろう。一方,過去形では,事態の生起を疑わないと話し手は考えるのだから,話し手はその事態が本当に起こったことだと強調する必要がなく,客観的に話すことができる。

現在完了形において,聞き手が事態の生起に疑いを持つかもしれないと話し手が判断するということは,話し手と聞き手がどのような関係にあるかにかかる。つまり,話し手は,発話を誰に対して,いつ行うかによって,自分と聞き手との関係が変わる可能性があるので,そのときどきの関係に応じて,聞き手が事態の生起に疑いを抱くかどうかを判断しなければならない。それに対して,ある事態が既定の事実として認められていて,いつ誰が聞いても,事態の生起に疑いを抱かないような事態は過去形で表現されるのにふさわしい。歴史の教科書のように客観的な歴史記述という体裁を取る場合に多く過去形が用いられるのは,誰がいつそれを読んでも,事態の生起に疑いを持たないだろうと書き手が判断できるからである。そのように,発話の状況によって変わる可能性があるという意味で現在完了形は主観的な時制であり,発話状況に依存しないという意味で過去形は客観的な時制と呼ぶことができるだろう。

以上のように,現在完了形においては表される事態の生起について聞き手が疑いを抱く可能性があるとして話し手が判断し,一方,過去形においてはそのような疑いを聞き手が抱かないだろうと話し手が判断するという区分は,従来の研究におけるいくつかの見解と整合性を持つと言える<sup>3</sup>。次の章では未来形と現在形の区分にも同様の観点を導入でき

<sup>3</sup> ただし, sein, haben, 話法の助動詞などはしばしば,他の動詞であれば現在完了形を用いるような場面で過去形が用いられる。例えば「～したことがある」のような「経験」は現在完了形で表すのが通常であるが, sein は „Ich war mal in Deutschland.“ (私はドイツに行ったことがある [ドイツにいた]) のように過去形にする場合が多い。「経験」を表すのは,聞き手が事態の生起に疑いを抱く可能性があるとして話し手が判断する典型的な場面である。sein 等が現在完了形になりにくい一つの理由は,これらの動詞が「助動詞」としての性質を強く持っているため,「助動詞」を「本動詞」化しにくいというこ



ることを見たい。

## 2. 未来形と（未来を表す）現在形

現在形は未来の事態を表さないことも多く、その場合は未来形と競合しないので、両時制の意味的相違は問題にならない。例えば, „Sie wohnt in der Schweiz.“（彼女はスイスに住んでいる）のように過去から発話時現在を経て、さらに未来にまで続くような継続的な事態を表す場合や, „Zweimal zwei ist vier.“（2 かける 2 は 4）のような一般論を表す場合, „Er steht um sieben Uhr auf.“（彼は 7 時に起きる）のような習慣的に反復される事態を表す場合, „Sie spricht Englisch.“（彼女は英語が話せる）のような個体の属性を表す場合など、現在形が広い意味で発話時現在において継続している事態を表す場合は未来形との意味的な相違を問う必要がない。また、スポーツの実況などで、発話時現在に次々に生起することを報告する現在形も未来形には変えられない。さらにまた、過去の起こった事態を現在形で表す、いわゆる「歴史的現在」も未来形では表されない。

それに対し、一回限りの未来の事態を表すためには、現在形も未来形も使われ、この場合に両時制の意味的相違が問題になる<sup>4</sup>。ここでまず考えるべきは、確定的な未来の事態は未来形では表せないということである。

(17) a Freitag habe ich Geburtstag. (金曜は私の誕生日だ)

b \*Freitag werde ich Geburtstag haben. (Vater 1994 : 75) (金曜は私の誕生日だろう)

上の (17) は、すでに確定的で、変更しようがない未来の事態は現在形で表さねばならず、未来形では表せないことを示す。フリッツは、未来形は現在形よりも主観的事態を表すと言う (Fritz 1997 : 94)。したがって、上の (17) のような事態も、話し手の主

---

とが考えられるが、はっきりとは分らない。また、ドイツ語圏の南部（ドイツ南部、スイス、オーストリア）において過去形が衰退し、現在完了形が多用されるという地方差についても、話し手の判断ということでは説明がつかない。

<sup>4</sup> 未来形は未来の事態ではなく, „Er wird krank sein.“（彼は病気だろう）のように現在の事態についての推量を表す場合もある。現在形では „Er ist krank.“（彼は病気だ）のように推量の意味が含まれないので、この場合も両時制は競合せず、意味的な違いが問題にならない。



観的な事態として捉えられれば、未来形で表される。

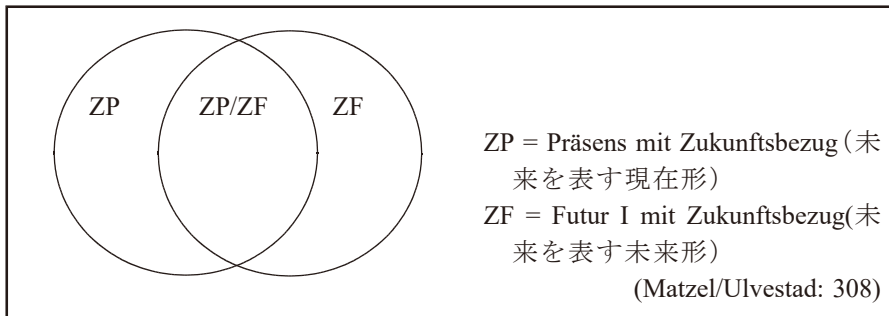
- (18) Morgen werde ich meinen 30. Geburtstag feiern, letztes Jahr habe ich nicht gefeiert. (Firtz, ibd. 95) (明日は私の 30 歳の誕生日のお祝いだ。去年は祝わなかったが)

このような未来形が主観的であるという見解に対しては次のような反論がある。マツエル & ウルヴェスタは、下の (19)-(21) のように、未来形も確定的な事態を表すことができると言う (Matzel/Ulvestad 1982)。

- (19) ... du kommst bald in den Himmel ... du wirst bald ein kleiner Engel sein (Amberg 84) (Matzel/Ulvestad, ibd., 314) (あなたは間もなく天国に行く……あなたは間もなく小さな天使になる)
- (20) Er stirbt, und ich bin schuld daran ... Er wird sterben! (Horster WE 45) (ibd.) (彼は死ぬ。私のせいで……彼は死ぬんだ)
- (21) Heute nacht wird der Arzt kommen ... Und ein Priester kommt auch (Rinser ... 33) (ibd.) (今夜医者が来る……そして僧侶も来る)

上の (19)-(21) ではそれぞれ同じような事態を現在形と未来形の両方で表している。勿論、これらの例においては、未来形が確実な事態を表すのではなく、現在形の方が不確実な事態を表すと見ることもできる。実際、(17) の誕生日のように 100 パーセント生起が確実な事態と比べると、これらの例で表される事態が生じる確率は低い。そうだとすれば、未来形は依然として不確実な事態を表すことに変わりはないということになる。しかしそれでも、話し手は、事態の生起の確実性が非常に高いと考える場合に未来形を用いるということと言えるだろう。そして現在形と未来形の差異は非常に小さく、多くの場合に交替可能だと考えられる (次頁の図を参照)。

特に、マツエル & ウルヴェスタは「保証 (Gewähr)」つきの (客観的な) 未来形は現在形と交換可能だと言う (Matzel/Ulvestad, ibd., 315 f.)。「保証」とは、当該の事態が生じることを話者が何らかの根拠 (公的な通知, しかるべき筋からの情報, 計画, 意志など) によって保証することである。例えば、次の (22) の未来形は公的な行事を表し、



その生起は確定的である。

- (22) Wissen Sie übrigens, daß morgen abend ein großes Feuerwerk im Park stattfinden wird? (Geissler 136) (ibid., 315) (ところで、明晩大きな花火大会が公園で行われるのをご存知ですか)

また、次の(23)では、未来形の表す事態は根拠づけられうるという前提があることが示されている。

- (23) Baum wird ... allein nach Kairo fliegen. — Verdammt, woher wissen Sie das denn? (Eisenkolb 349) (ibid.) (バウムは一人でカイロへ飛行機で行く。—ええっ、どうしてそんなことが分かるんですか)

また、次の(24)では、話し手本人が事態の生起を保証している。

- (24) ... ich persönlich übernehme die Garantie, daß mein Vater die Summe zurückerstatten wird (Schnitzler 265) (ibid., 317) (私個人が、私の父がそのお金を返済することを保証します)

それに対し、次の文では、条件文の表す「私があなたに名前を挙げる」という事態が起こらないかぎり、主文の表す事態が生じない。このような保証なしの(主観的な)未来形では、その事態の生起が不確実であり、現在形と交換できない。

- (25) Wenn ich Ihnen den Namen nenne, werden sie jubeln (Konsalik DD 349) (ibid., 320) (もし私があなたにその名前を挙げれば、彼らは歓声を上げるだろう)

しかし、筆者の考えでは、保証のあるなしにかかわらず、未来形は確定的な事態を表す。問題は誰にとって確定的なのかである。未来形の表す事態は話し手にとっては確定的であるが、聞き手にとっては確定的ではない。もっと正確に言えば、話し手は、事態の生起が確実だと思っているが、聞き手はその生起に疑いを抱くだろうと判断する場合に未来形を用いるのである。それに対し、誕生日のように、事態の生起に聞き手が疑いを抱かないだろうと話し手が判断すれば、現在形が用いられる。

従来の研究では未来形の表す事態の確実性を問題にする場合に、それが誰にとって確実であるかという区別に目を向けなかった。そのような区別なしに、未来形が「時制」なのか「話法の助動詞」に準ずると見るべきなのかと問うてきたが、それはあまり生産的な議論とは言えないだろう。話し手にとっては事態の生起が確実という点では、未来形は未来の事態を表す「時制」であり、聞き手が確実であるか疑いを抱く可能性があるという点では、未来形の werden は「話法の助動詞」に近いということになる。

以上述べたような、未来形においては話し手にとっては確実、聞き手にとっては確実ではないかもしれないと話し手が判断する事態を表すという考えは従来の研究の知見にも沿うものである。例えば、未来形はしばしば話し手の事態に対する強い感情を表すとフリッツは言う (Fritz, ibid., 93 ff.)。

- (26) Der wird Augen machen! —wenn er ein solches Frühstück bekommt, der wird Augen machen! (Frisch 308) (Fritz, ibid., 93) (あいつはびっくりするだろうよ! こんな朝食をとることになれば、あいつはびっくりするだろうよ!)
- (27) Man wird uns fluchen, ja, die ganze Welt wird uns fluchen, Jahrhunderte lang. (Frisch 69) (ibid.) (人は我々をののしるだろう、いや世界中が我々をののしるだろう、何百年も)

このように未来形において強く感情が表現されるのも、事態の生起を疑うかもしれない聞き手に対して、それは確かであると話し手が強調しているということから説明できる。

また、作家ペーター・ビクセルは『『脅迫』の未来形』というエッセーの中で、未来形は未来を表すのではなく、「脅迫」のための形式であると言う。

„werden“という語を私は通常脅迫として使う。私は子供達に「お前も今にそれを思い知るぞ Du wirst das noch selbst erleben」と脅迫する。[……] 教師や父親が „Du wirst“で文を始めると、そのあとにはよくない話が続く。(Bichsel : 7 f.)

ビクセルは勿論、未来形=「脅迫形」と本気で主張しているわけではない。しかし、これは単なる冗談というわけでもなく、半分は本気と受け取るべきであろう。というのも、この冗談半分の主張には、未来形の意味の核心が含まれているからである。すなわち、「お前も今にそれを思い知るぞ」という「脅迫」には、話し手である親が聞き手である子供に向かって、「お前はそうなるとは思っていないかもしれないが、お父さんはそうなるのがわかっているんだぞ」という、子供の考え違いを正し、自分の考えが正しいと主張する強い気持ちが含まれている。これはまさに、未来形において話し手は事態の生起が確実だと思っているが、聞き手は確実とは思わないかもしれないと話し手が判断しているということと合致する。

また、次の関口の説明にも同様の解釈が可能である。

未来、未来完了は厳密にいうと、「未来」に対して用いるというよりは、むしろ「確実らしく言うための表現法」である（たとえば確約、決意、予言、など）：Es wird regnen.（きっと降るでしょう）；Wird er zahlen?（ほんとうに払うでしょうか）；Das werde ich schon zu verhüten wissen.（そうはさせぬぞ）；Unsere Zeit wird schon kommen.（今にきつとおれたちの時代がやってくる）。発音の際 wird を強めるとますます「必ず」の意が強調されるのをみても、werden の機能がわかるであろう。——それに反し、別に確約、予言、など確実性が問題とならない場合には、未来は現在で、未来完了は現在完了で表現する方が普通である：Morgen ist Sonntag.（明日が日曜であるということは、その確実性を強調する必要がないほど確実であるから werden を用いない）。（関口：143）

関口の「確実性を強調する必要がないほど確実」な場合には未来形を用いず、現在形を

用いるという言い方に注目したい。これは確実性をわざわざ強調しなければならない場合には未来形を用いるということの裏返しの表現である。確実性を強調しなければならないということは、話し手は確実だと思っているが、聞き手は確実とは思わないかもしれないと話し手が判断している場合に起こると言えよう。

また、ヴェルケによれば、下の「先生が来る」という同様の事態を表す (28) と (29) では、現在形の (28) の事態よりも、未来形の (29) の方が遠い未来の出来事を表すように感じられると言う (Welke 2005 : 432)。

(28) Der Lehrer kommt. (ibd.) (先生が来る)

(29) Der Lehrer wird kommen. (ibd.) (先生が来る)

これについても、現在形の方が近い未来の事態を表すと感じられるのは、発話時現在においてすでに何らかの兆候があり、すぐに実現しそうな事態であれば、当然話し手は、聞き手が事態の生起に疑いを抱かないと判断するであろうということから説明可能である。それに対し、すぐに実現しそうな兆候が何もないければ、聞き手が疑いを抱くかもしれないと話し手が判断するのは自然であり、結果、話し手は未来形によってすぐには起きそうにない事態を表すことになる。

### 3. 結 論

以上の考察から、現在完了形と未来形は、表される事態の生起について聞き手が疑いを抱くかもしれないと話し手が判断するという点で共通し、それに対し、過去形と未来を表す現在形は、表される事態の生起について聞き手が疑いを抱かないだろうと話し手が判断するという点で共通するということが明らかになった。聞き手にとって事態の生起が確定的か否かということに対する話し手の判断によって時制が使い分けられ、それが過去の事態についても未来の事態についても同じように行われるということである。このような情報提示の仕方の並行性が何を意味するのかという問いにはすぐには答えられないが、物語が過去形や現在形では語ることができるが、現在完了形や未来形では語ることができないということを考えると、物語は基本的に聞き手が事態の生起に疑いを抱かないと話し手が判断していることを前提にして始めて成り立つものだという事は

言えるだろう。

## 用 例 出 典

- Grimm : Brüder Grimm : *Kinder- und Hausmärchen*. Bd. 1. Stuttgart : Reclam 1980.  
 Huch, Ricarda : *Der Fall Deruga*. Frankfurt a. M. : Insel 1992.  
 Kafka, Franz : *Das Schloß*. Frankfurt a. M. : Fischer Taschenbuch 1987.  
 Stifter, Adalbert : *Bergkristall*. Stuttgart : Reclam 1985.

## 参 考 文 献

- Bichsel, Peter : Die grammatikalische Zukunft. In : *Schulmeistereien*. Darmstadt : Luchter 1985, S. 7-10.  
 Fritz, Thomas : Zur Grammatikalisierung der zusammengesetzten Verbformen mit *werden* — *werden* und die Modalverben im frühen Deutsch und heute. In : Vater, Heinz (Hg.) : *Zu Tempus und Modus im Deutschen*. Trier : Wissenschaftlicher Verl. 1997, S. 81-104.  
 Grønvik, Ottar : *Über den Ursprung und die Entwicklung der aktiven Perfekt- und Plusquamperfektkonstruktionen des Hochdeutschen und ihre Eigenart innerhalb des germanischen Sprachraumes*. Oslo : Solum 1986.  
 Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim : *Deutsche Grammatik*. Leipzig : Langenscheidt <sup>19</sup>1999  
 Matzel, Klaus/Ulvestad, Bjarne : Futur I und futurisches Präsens. In : *Sprachwissenschaft*. 7 (1982), S. 282-328.  
 Thieroff, Rolf : *Das finite Verb im Deutschen*. Tübingen : Narr 1992.  
 Vater, Heinz : *Einführung in die Zeit-Linguistik*. Hürth-Efferen : Gabel 1994.  
 Weinrich, Harald : *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*. Stuttgart : Kohlhammer <sup>4</sup>1985.  
 Welke, Klaus : *Tempus im Deutschen. Rekonstruktion eines semantischen Systems*. Berlin : Gruyter 2005.  
 Wunderlich, Dieter : *Tempus und Zeitreferenz im Deutschen*. München : Hueber 1970.  
 金子哲太 : 現在完了形の「主観的」意味について—通時的考察にもとづいて— 『東北ドイツ文学研究』 51 (2008), 87-104 頁  
 — : 『ドイツ語現在完了の語用論的意味—その通時的考察—』 (博士論文) 2013 年

## Über die Parallelität des Bedeutungsunterschieds zwischen Perfekt und Präteritum zu dem zwischen Futur und Präsens

Satoru SHIMAZAKI

Die Bedeutungsunterschiede zwischen Präteritum und Perfekt auf der einen Seite und zwischen Futur und Präsens mit Zukunftsbezug auf der anderen Seite sind bereits Gegenstand zahlreicher Debatten gewesen, nicht aber das Verhältnis der beiden vergangenen Tempora zu den beiden zukünftigen. In dieser Arbeit stelle ich die These zur Diskussion, dass das Perfekt dem Futur ähnlich ist, während das Präteritum eine dem Präsens entsprechende Funktion hat: Im Perfekt und Futur wird ein Sachverhalt dargestellt, den der Sprecher für sicher hält, aber von dem er gleichzeitig annimmt, dass der Hörer ihn für unsicher halten könnte; beim Präteritum und futurischen Präsens handelt es sich um einen Sachverhalt, an dessen Sicherheit nicht nur der Sprecher selbst glaubt, sondern von dem der Sprecher auch annimmt, dass der Hörer daran nicht zweifelt. So lässt sich leicht verstehen, dass ein perfektischer Satz, der einen allgemein bekannten Sachverhalt darstellt, wie „Goethe ist gestorben“, merkwürdig wirkt, während ein präteritaler Satz, der denselben Sachverhalt darstellt, wie „Goethe starb“, keine solche Wirkung hat. Denn der Hörer zweifelt selbstverständlich nicht an einem allgemein bekannten Sachverhalt, während er gegen einen unbekannten Sachverhalt skeptisch sein kann. Wie im Perfekt macht ein festgelegter Sachverhalt im Futur wie „morgen wird Sonntag sein“ einen komischen Eindruck. Ein solcher Sachverhalt muss im Präsens formuliert werden, wie in „morgen ist Sonntag“, denn das Futur drückt einen Sachverhalt aus, den der Hörer, der Vermutung des Sprechers nach, für unsicher hält, wie im Perfekt, während der Sachverhalt im Präsens als Tatsache feststeht, wie im Präteritum.